

「ギンリョウソウ (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

多くの顕花植物(種子植物)は、光合成によって自分で自分の体に必要な栄養分を作り出す。菌類(キノコやカビ)も変形菌も、自分で栄養分を作り出すことはしない。枯れ葉、朽ち木、動物の死骸、種類によっては生きた樹木や虫に寄生するものもある。



写真は「ツルタケ」(テングタケ科) 地中にまるでへびの卵のような「幼菌」を形成し、それが大きくなると殻を破って成長する。地面の腐葉土などから養分を摂取して、菌糸を成長させる。



こちらは、切り株に発生した菌類。一瞬、巨大な変形菌の変形体に見えたが、これは変形菌ではない。移動をせず、ある一点を中心に拡大するだけだ。恐らく「トリコデルマ菌」の一種だろう。長い時間をかけて朽ち木の中で菌糸を成長させ、気温や湿度の変化をきっかけに、白い菌体(子実体)を爆発的に拡大させた姿と考えられる。

ところが、花を咲かせる植物にも、まるでキノコのような生活をしている種類がある。



キノコがよく発生するような、あまり陽当たりの良くない湿った林床に、白い花びらのような塊を見つけることがある。



これは「ギンリョウソウ」*Monotropa humile* (ツツジ科) という植物だ。土から伸びている柄のようなものが「茎」で、鱗片状の葉を持つ。その上に、体の大きさと比較してかなり大きな花をつける。花をつけるので、明らかに顕花植物なのだが、変わっているのは「全身が真っ白」ということだ。葉緑体を全く持たず、花の一部を除くすべての細胞が無色なのだ。

私は子どもの時、祖父の家の裏庭でこれを見つけたことがある。祖父は「これは夜に光るんだよ」と教えてくれた。夜にもう一度見に行ったが、光っていなかった。その後も、光っているのを見たことがない。